

Title	ヨーハン・ヴォルフガング・ゲーテ『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代、あるいは諦念の人々』初稿(1821年): 翻訳の試みと覚書(1)
Sub Title	J. W. Goethe : Wilhelm Meisters Wanderjahre oder Die Entsagenden (I. Fassung). Übersetzung und Anmerkungen (1)
Author	山本, 賀代(Yamamoto, Kayo)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2018
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・文学 (Hiyoshi-Studien zur Germanistik). No.55 (2018. ) ,p.159- 171
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	ハンス・ヨアヒム・クナウプ教授退職記念号 = Sonderheft für Prof. Hans-Joachim Knaup
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20180331-0159">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20180331-0159</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ヨーハン・ヴォルフガング・ゲーテ  
『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代、  
あるいは諦念の人々』 初稿（1821年）  
——翻訳の試みと覚書（1）——

山本賀代

試訳<sup>1)</sup>

ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代

いまや遍歴の時代のはじまり  
旅人の足どり おぼつかず  
うたや祈りにふけらずも  
霧立ちこめ 小径あやしくなれば  
その真摯なまなざし  
おのが心 愛するものの心に向かう<sup>2)</sup>

- 
- 1) 翻訳の底本には Johann Wolfgang Goethe: *Sämtliche Werke. Briefe, Tagebücher und Gespräche*. 40 Bde. Hg. von Hendrik Birus u.a. Frankfurt am Main 1987–2013 [=FA] の Bd. 10 *Wilhelm Meisters Wanderjahre*. Hg. von Gerhanrd Neumann u. Hans-Georg Dewitz. Frankfurt am Main 1989 [=FA10] を使用し、本書の詳細な解説・注釈とともに Johann Wolfgang Goethe: *Sämtliche Werke nach Epochen seines Schaffens*. Hg. von Karl Richter in Zusammenarbeit mit Herbert G. Göpfert u.a. München 1985–1998 [=MA] の Bd. 17 *Wilhelm Meisters Wanderjahre. Maximen und Reflexionen*. Hg. von Gonthier-Louis Fink, Gerhart Baumann und Johannes John. München 1991 [=MA17] を常に参照した。今回訳出した範囲は FA10, S.11–18.
- 2) 1820/21年に成立。2稿では削除されるが、決定版ゲーテ全集第3巻の「エピグラム風に」の項目に「遍歴のめぐみ」というタイトルで収録される。

かくして古い宝をとりあげる  
このたびはまこと不思議な方法で  
黄金<sup>きん</sup>にならずとも  
金属にはかわりなし  
溶かされ 分離され  
精製され 測られる  
みなが楽しみ  
好みの型に铸られんことを<sup>3)</sup>

---

3) 1820/21年に成立。2稿では削除され、決定版全集にも収録されていない。

ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代  
あるいは  
諦念の人々

ゲーテの小説

第1部<sup>4)</sup>

---

4) 2稿も同名のタイトルとなるが、「ゲーテの小説」「第1部」は削除される。

いまも昔のわたしのままと  
言いきることは難しい  
されど問われれば 返そう  
心はあいかわらずと  
不安にもなれば  
歓喜にも酔うが  
ひと筆ひと筆としたため  
やがてまた落ちつきをとりもどす<sup>5)</sup>

---

5) 1820/21年に成立。2稿では削除され、決定版全集にも収録されていない。

オティーリエ・フォン・ゲーテに

先を急ぐまえに  
ふと立ちどまり 見わたしてごらん  
まわりのおしゃべりも  
いずれおさまるだろう

子どもだったおまえを  
少女だったおまえを  
心のなかで読みとっておくれ  
おまえを感じるままに

おまえの誠実さへのごほうびに  
この歌をうたってもらおう  
父に 息子に

珠のような男の子たちを産んでくれたおまえ<sup>6)</sup>

---

6) 1820/21年に成立。2稿では削除されるが、決定版全集第4巻の「さまざまな贈ることば」の項目に収録される。オティーリエ（旧姓フォン・ポグヴィッシュ、1796-1872年）は1817年にゲーテの息子アウグストと結婚。ゲーテにとって二人目の孫ヴォルフガングの誕生が初稿出版直前の1820年9月半ばであった。

なにゆえに怯えてばかりいるのか  
 人生は短く 一日は長い  
 めざすが天か<sup>たかみ</sup>はわからぬが  
 心はたえず先をいそぐ  
 彼方へ彼方へと  
 おのれから逃れたがる  
 恋人の胸に辿りつけば  
 天にもものぼる夢見心地  
 人生の渦に引きさらわれても  
 いつもただ一所にしがみつく  
 何を望もうと 失おうと  
 心はやはり おのれでしかない愚かもの<sup>7)</sup>

---

7) 1818年7月22日に成立。2稿では削除されるが、決定版全集第11巻の『西東詩集』*West-östlicher Divan* (1827年)の「箴言の書」に収録される。

おまえが試される時 其の理由<sup>わけ</sup>は運命が知っている  
節度が望まれているのだろう ただしたがえ<sup>8)</sup>

世界に対して何をなすのか それはすでにできているのに  
なにごとく創造主が考えぬかれたこと  
おまえのさいは投げられた 其の流儀にしたがえ  
旅ははじまった おわりまで続けよ  
焦心してもかわらぬ  
落ちつきを失ない 投げだされるだけ<sup>9)</sup>

心の深淵も最高の叡智も識る賢者  
エンヴェリは説く  
万事につけ大切なのは  
誠実さ 判断力 そして協調性<sup>10)</sup>

受け継いだものはなんと立派で広大なことか  
時間はわが所有 わが耕地は時間<sup>11)</sup>

昼のうちに 働け  
夜になれば もう働けない<sup>12)</sup>

- 
- 8) 1819年末から1820年4月のあいだに成立。2稿では削除されるが、決定版全集第11巻の『西東詩集』の「箴言の書」に収録される。
- 9) 1818年6月29日に成立。2稿では削除されるが、決定版全集第11巻の『西東詩集』の「箴言の書」に収録される。
- 10) 1818年5月3日から8月12日のあいだに成立。2稿では削除されるが、決定版全集第11巻の『西東詩集』の「箴言の書」に収録される。エンヴェリは12世紀のペルシャ詩人。
- 11) 1819年末から1820年4月のあいだに成立。2稿では削除されるが、決定版全集第11巻の『西東詩集』の「箴言の書」に収録される。
- 12) 1818年6月29日に成立。2稿では削除されるが、決定版全集の第11巻の『西東詩集』の「箴言の書」に収録される。



「そんなにあくせく生きて  
毎日が楽しいものなのか」  
その日の仕事をこなしてこそ  
穏やかな夕べの来るものを

なしうることもないままに  
あちらこちらと引きまわされては  
おのれを失ない  
一日はだいなし

されどみなに望まれて  
水を得た魚のごとく働けば  
思いのままのわが独壇場  
それでこそ わが一日

場所も  
時も消え  
含蓄深い言葉こそ  
永遠とわに響く<sup>13)</sup>

---

13) 1820 年末に成立。2 稿では削除されるが、決定版全集第 3 巻の「エビ  
グラム風に」の項目に「人生のよろこび」というタイトルで収録される。

\*

ヨーハン・ヴォルフガング・ゲーテ Johann Wolfgang Goethe (1749–1832 年) の最後の小説『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代、あるいは諦念の人々』*Wilhelm Meisters Wanderjahre oder die Entsagenden* (初稿 1821 年, 2 稿 1829 年。以下『遍歴時代』) の成立史は長く複雑である<sup>14)</sup>。『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』*Wilhelm Meisters Lehrjahre* (1795–96 年。以下『修業時代』) の続編に関する最初の言及は、すでに『修業時代』脱稿前、1796 年 7 月 12 日付けのフリードリヒ・シラー宛て書簡<sup>15)</sup>に見いだされ、1797 年あるいは翌年には最初期の 3 つのシェーマが誕生する。続編を想定した「第 1 部」(=初稿『遍歴時代』) が 1821 年に単独出版されたのち、1829 年に決定版全集第 21 巻から 23 巻として 2 稿『遍歴時代』が出版される。構想期間を含めば、実に 30 年以上の年月が流れている。

フランクフルト版の解説は、初稿脱稿までの成立史を 4 段階に分けて整理している。第 1 段階 (1796–1807 年) は執筆前の構想段階。初期シェーマや当時の書簡から、旅と書簡体形式を基本構造としたフェーリクスの成長物語が計画されていたことがうかがえる。第 2 段階 (1807–10 年) では、1807 年 5 月から夏にかけてノヴェレなど第 1 部の重要な要素の多くが執筆される。第 2 部の構想も生まれる。第 3 段階 (1811–18 年) で執筆は一旦休止する。この時期、ゲーテはばらばらのノヴェレを一連のシリーズとして計画的に『婦人手帳』に公表している。第 4 段階 (1819–21 年) は第 1 部刊行に向けての最終的な執筆時期。同時に第 2 部の構想も

---

14) 成立史のスケッチには主に FA10, S.777–794 および Ehrhard Bahr: „*Wilhelm Meisters Wanderjahre oder die Entsagenden*“. In: Bernd Witte u. a. (Hg.): *Goethe-Handbuch in 4 Bdn.* Stuttgart 1996, Bd. 3, S.186–231, hier bes. 186–195 を参考にした。

15) FA31, S.210.

進み、すでに執筆されていた部分もある。1821年7月までゲーテはひきつづき第2部を執筆するつもりだったが、プロテスタント牧師ヨーハン・フリードリヒ・ヴィルヘルム・プストクーヒェンの偽作のほうが人気を博するなど、読者たちの冷ややかな反応に落胆して執筆を中断してしまう。

次に2稿の成立史となる（初稿時代の構想・執筆部分がどのように変化したか、取りこまれていったかは、残された補遺から慎重に検討する必要がある）。第2部の執筆は1825年6月に着手されるが、すでに公表された第1部の続編という当初の方針はまもなく修正される。解体された初稿が全体に配分され、そこにすでに執筆されていたもの、新たに書かれたものが挿入されていく。1827年5月には原稿を綴じて、見直し作業の段階に入る。ところが決定版全集の編集作業に問題が生じ、『遍歴時代』は予定していた2巻から3巻に分け直さなければならなくなる。1828年2月から11月にかけて小説を3部に分ける作業が続く。この段階でページ数の確保のために2つのアフォリズム集が挿入され、しかも印刷の都合でゲーテの意図とは異なる配置となった。

このように複雑な成立史・混乱した印刷史をもつ『遍歴時代』の批評版は、長らく「ゲーテ文献学のもっとも困難な課題であり切実な不足」<sup>16)</sup>であった。フランクフルト版の編集者ゲルハルト・ノイマンとハンス＝ゲオルク・デーヴィッツは、『ヴィルヘルム・マイスターの演劇的使命』*Wilhelm Meisters theatralische Sendung* から『修業時代』そして『遍歴時代』へという従来のマイスター小説研究には初稿『遍歴時代』と2稿『遍歴時代』の2つの稿の存在への認識が不足していたと指摘し、この2つの稿の徹底的な比較検討の重要性を強調している。このような問題意識は、成立史を厳密に吟味するための多数の補遺収録とともに、2つの稿の対照表の作成にも現れている。同様の対照表や初稿への詳しい解説がミュンヘン版にも見いだされることから、今後、『遍歴時代』研究において初稿および改作をめぐる議論が活発化することは確実だろう。

16) FA10, S.970.

しかし、これまでに『遍歴時代』初稿を取りあげた研究はまだ少ない。クルト・ビムラーが、「膨大なゲーテ文献のなかでまだ一度も詳細に論究されていない『遍歴時代』の2つの稿の相違を[……]体系的に確認すること」<sup>17)</sup>を課題とした博士論文「ゲーテの『遍歴時代』の初稿と2稿」を発表したのは1907年であったが、ハンス・ライスは1965年においてもなお、初稿に注目したほぼ唯一の研究としてビムラーの業績を挙げ<sup>18)</sup>、今日では初稿は読まれることがなく、『ウア・ファウスト』*Urfaust*のような断片としての価値も認められていない、と診断した<sup>19)</sup>。しかし、ゲーテの小説ジャンル全般に共通する改作原理を探求したライスのこの論考は、「より大きな客観性への道」<sup>20)</sup>という一般的な結論にとどまっている。1994年、「50歳の男」を詳細に分析してゲーテ時代の「美容と教養」のテーマに取りくんだゲーザ・ダーネも、あいかわらず『遍歴時代』の2つの稿に関するわずかな研究としてビムラーとライスに言及するしかなかった<sup>21)</sup>。

一方で、現代小説に匹敵する独特な作品構造への再評価は近年かなり進んだが、そこで注目されたのはもっぱら2稿である。『遍歴時代』の2稿を語る時、ゲーテは個々のものへの志向・愛着を示す「集合的」*kollektiv*や「集合体」*Aggregat*という言葉をししばしば用いており<sup>22)</sup>、最近

17) Kurt Bimler: *Die erste und zweite Fassung von Goethes „Wanderjahren“*. Beuthen 1907, S.5.

18) Hans Reis: *Wilhelm Meisters Wanderjahre. Der Weg von der ersten zur zweiten Fassung*. In: *Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte* 39. Stuttgart 1965, S.36.

19) Ebd., S.44.

20) Ebd., S.57.

21) Gesa Dane: „*Die heilsame Toilette*“. *Kosmetik und Bildung in Goethes „Der Mann von fünfzig Jahren“*. Göttingen 1994, S.17.

22) 例えば、1828年9月11日のエッカーマンとの対話 (FA39, S.271), 1829年7月28日および11月23日付けロホリッツ宛て書簡 (MA17, S.1023 u. S.1025), あるいは1830年2月18日のフリードリヒ・フォン・ミュラーに対する発言 (MA17, S.1026) など。

の『遍歴時代』研究さらには晩年のゲーテ研究にとって重要なキーワードとなっている<sup>23)</sup>。しかし『遍歴時代』初稿を世に送りだしたころのゲーテの発言には、まだためらいが残る<sup>24)</sup>。2稿をめぐる議論をより正確なものとし、晩年のゲーテの創作原理への理解を深めるためには、初稿の構想段階から2稿刊行までの長い創作過程をできる限り厳密に再現したうえで、両稿の詳細な比較分析を行なう必要があるだろう。『遍歴時代』第1部がどのような「ひとつの作品」だった（あるいはでなかった）のか、その原稿がどのように解体され編集されていったのか——ゲーテはしばしばエッカーマンにその作業を楽しげに語っている<sup>25)</sup>——を、対照表だけではなく、できるだけ具体的に追体験したいとの思いから『遍歴時代』初稿の試訳に取りくむこととした。

### 今回の試訳について

初稿は巻分けのない全18章から構成されている。今回訳出したものは、第1章「エジプトへの逃避」の前に置かれた複数の詩である。2編の導入の詩「いまや遍歴の時代のはじまり……」と「かくして古い宝をとりあげる……」が掲げられたあと、3ページ目にタイトルページがくる。その後、第1章までにさらに5編の詩（「いまでも昔のわたしのままと……」「オテイーリエ・フォン・ゲーテに」「なにゆえに怯えてばかりいるのか……」「おまえが試されるとき その理由は運命が知っている……」「そんなにあくせく生きて……」が続く。

23) Vgl. Martin Bez: *Goethes „Wilhelm Meisters Wanderjahre“*. *Aggregat, Archiv, Archivroman*. Berlin u. Boston 2013.

24) たとえば「もしこの小品がひとつのかたまりから成りたっていないとしても、あなたはひとつの意味のなかにそのようなものをきっと見いだすでしょう」（1821年7月23日付けボアスレー宛て書簡 FA10, S.853）や、「この書物がひとつの部分からできていないとしても、ひとつの感覚からできています」（1821年9月7日付けツァウパー宛て書簡 Ebd.）など。

25) 1827年1月15日のエッカーマンとの対話（FA39, S.198）。

訳注には2稿との異同や成立史にかかわる基本情報を記した。すべての詩が初稿成立史の第3段階の終わりから第4段階に執筆されている。これらの詩は2稿においてすべて削除されるが、「かくして……」「いまでも昔の……」を除き、決定版全集の別の場所にあたな位置を獲得する。再録先のひとつである『西東詩集』も、1819年初版刊行当時からゲーテの念頭にはすでに将来の改稿版があった<sup>26)</sup>。ゲーテにおいて印刷することは作品が完成され固定されることではなく、それはあいかかわらず「溶かされ分離され」うる「宝」であり続けたのだろう。このイメージは、『遍歴時代』2稿で初めて描かれるマカーリエのアルヒーフでの水銀の比喩を思い起こさせる。

「オティーリエ・フォン・ゲーテに」は、ゲーテ家の男児誕生という伝記的事実と直接結びついている。小説との関係では、作者ゲーテと架空の編者とを混同させるような印象を読者に与え<sup>27)</sup>、小説を自伝の一部として見立てる語りの手法<sup>28)</sup>として議論される一方で、父と息子そして若い女の関係は、小説内のヴィルヘルムとフェーリクスそしてヘルジーリエの関係と容易に重ねられる<sup>29)</sup>。もっともこの三角関係は、この詩が削除された2稿において大きく発展する物語要素のひとつである。

試訳にあたっては、慶應義塾大学経済学部教授のハンス・ヨアヒム・クナウプ先生から多くの貴重なご教示をいただきました。この場をかりてお礼申しあげます。

26) Vgl. FA3/1, S.743f.

27) MA17, S.1085 (Kommentar zur ersten Fassung).

28) Bahr: a. a. O., S.198.

29) アウグストとオティーリエの結婚は当初より順調とはいかず、一方でゲーテとオティーリエは非常に仲が良かった。Vgl. Claus Sommerhage: *Familie Tantalos. Über Mythos und Psychologie in Goethes Novelle „Der Mann von fünfzig Jahren“*. In: *Zeitschrift für deutsche Philologie* 103. Berlin 1984, S.79f.